

戦後50年の日米心理抗争 ——真珠湾奇襲とヒロシマ原爆投下——

小 野 修

I

広島への原爆投下がなぜ行われたのか、また、この投下についてどう思うか、といった問いは広島への被爆以来、50年後の今日に至るまで倦きることなく繰り返されてきた。

広島への壊滅の三日後に長崎に二発目の原爆が落されて、長崎も壊滅した。核攻撃を受けた都市が、人類史上、広島と長崎に限られるということは、世界に向けて核兵器の全面的廃棄と核実験禁止を訴える日本の立場を、国際社会で無視できない程に強いものにしていく。

広島と長崎の惨状認識が第3のヒロシマの出現を阻んできた。核兵器の保有数が一万発を越え、保有国も核拡散の為に数を増し、核兵器の小型化も進み、歩兵の携帯用にまで戦術核の開発は進んだ。

しかも過去50年間に、数々の戦争と国際紛争が起り、特にソ連の崩壊後は紛争が頻発してきたがソ連から流出したかもしれない核兵器を含み、核兵器攻撃が起らずに今日に至ったのは奇跡的とも言える。これを核兵器の国際的な管理体制が曲りなりにも機能してきた為と見るのは一面的な観方である。イラクや北朝鮮にたいする核兵器製造疑惑はアメリカが主導権を握ったかたちで国連による解明と疑惑施設の解体が進んでいるが、他方すでに冷戦体制のもとで原爆保有国となっていたイスラエル、インド、パキスタン、などは放置されている。南アフリカは一旦はじめた核兵器開発を中止した。

湾岸戦争の際、もしイラクのスカッド・ミサイルや長距離砲が生物化学兵

器を積んでイスラエルの行政や経済の中心であるテル・アビブに撃ち込まれたとしたら、イスラエルはバグダッドを核攻撃したかもしれない。イスラエルはかつて、イラクの建築中の原発をミサイルで全壊させたこともあり、湾岸戦争ではイラクのミサイルをアメリカから導入した迎撃ミサイルのパトリオットで打ち落とすだけで反撃をしなかったのはアメリカの圧力がかかっていたからである。考えてみればイラクが核武装を試みたり、生物化学兵器の開発をすすめた一因は、イスラエルの核武装に対抗するためであった。このことは北朝鮮が韓国にある米軍の核兵器に対抗しようとして自らも核の開発を試みたのと同じである。

しかし、核兵器はナガサキで使われたあと、アメリカだけでも1051回の実験は行われてきたが、一度も戦争で用いられたことがない。少なくとも今まで誰も使おうとしてもつかうことができなかった。それほどこの破壊力は周知のものとなっていた。

マッカーサーはトルーマン大統領の命令で日本に原爆を落した。彼が朝鮮戦争の際に中国に対して原爆を使用しようと考えてトルーマンに伺いを立てたとき、トルーマンはあっさりとマッカーサーを罷免した。マッカーサーとしては何故中国に原爆を落すことが間違っているのかが読めなかった。日本を占領し、アメリカ製の日本国憲法を制定させ（それ自体はポツダム体制を日本が受容した当然の帰結であった）、象徴天皇制によって日本の傳統勢力と国民の大多数の支持を確保し、戦争放棄を規定した第九条により革新勢力とアジア諸国を納得させ、20世紀のシーザー気取りであったが、彼が大統領選での対立候補たりうることを考えたトルーマンは政敵となる前にマ元帥を踏みつぶしたのだった。

マッカーサーは日本人の心を理解したつもりだっただろうが、彼にはヒロシマもナガサキもオキナワもフィリピン奪還につづく自己にとっての戦勲ではあっても反省の糧ではなかった。だからこそ赤い中国の上に原爆を落とすことを考えた。将軍にとって勝利のみが価値をもち、味方の犠牲が少なけれ

ば勝利はそれだけに映えるものとなるというメンタリティの中には敵方の無辜の人民の生命の尊重など存在しない。マッカーサーが自分のひきいたアメリカ軍がもたらした広島や長崎の原爆の惨状についてどのような感想をもっていたか知りたいものである。

広島と長崎に原爆を落した責任は勿論トルーマン大統領にあるのであって一司令官にすぎないマッカーサーにはない。しかし、マッカーサーが日本を原爆を用いて攻略した経験から、第三のヒロシマを中国でつくろうと考えたことはこの人物の人種の偏見と、核戦争の脅威がつかめていない歴史感覚の貧困さをよく物語っている。ここには被爆者となるかもしれない人々への思いやりもないばかりか、攻撃後の国際世論の非難、さらにはソ連の参戦までひき起す可能性も読めていない。この程度の時代感覚では大統領選挙に出ても通るはずがない。彼が退任の挨拶に自らを消えゆくべき老兵にたとえたことは正しかった。

II

平成七年（1995年）は太平洋戦争終結から50年目にあたるので半世紀前の回顧展が色々な話題を提供した。そのひとつがスミソニアン博物館へのエノラ・ゲイ号、つまり日本に原爆を落した搭載機の（胴体部分の）展示を日米の非難の応酬のあと大幅に縮小したことと、もう一つが広島への原爆投下の記念切手を発売直前に日本政府の抗議により発売取消しとした事件である。

エノラ・ゲイは原爆搭載用に爆弾収納部分を改造したB29型爆撃機であり、その銀色のジュラルミンの機体はメタリックで美しい、と50年前の当時からアメリカ国民の大多数は感じていたと思われる。この美意識の背後にはこの機体がLittle boy（男の赤ん坊）という名のつけられた原子爆弾により平和を運んでくれたコウノトリのイメージが存在するのである。しかも、キリスト教徒にとっては原爆のキノコ雲が燔祭の煙と映り、機長たちは上空に立ちこめた人肉の焼ける臭気を嗅いだという。つまり、太平洋戦争のすべ

ての罪は地上で犠牲となった「小羊」が償ってくれたのだと考える。だからこそ、ヒロシマの原爆雲は記念切手の図柄にふさわしいものとして選ばれ、美的なキノコ雲に、「原爆投下が戦争の終結を早めた」と解説的なキャプションまでもそえたのだった。こうしたことがアメリカでは通用しても、日本人の感情を逆なでするものであることに気付かない不用意な部分が企画者たちに伺われたことは残念な事実であった。しかし、このことを咎めてみたところで仕方がないのではないか。

アメリカ国民の75%から80%まで、が広島への原爆投下は正しかったと考えているという統計上の数字はよく知られている。アメリカ人のこの態度をとがめても仕方がないのは、彼らが原爆の投下をきめたわけではなく、投下をきめたのはマンハッタン計画を命じ推進してきたアメリカの大統領府であり、最終的にはトルーマンであったことは動かし難い事実なのである。問題であるのは原爆投下は結果としては非道な行為だったと認め、日本の被爆者への同情心も、核兵器の使用禁止を求める気持まで強く持ちつつも、なお50年前の原爆投下は正しかったと考えているのが大多数のアメリカ国民の気持であることを、日本人がいまだに理解できずにいるという点である。

かつてブッシュ元大統領が任期中に訪日したとき、広島・長崎への原爆投下を省みてトルーマンは間違った決定を下したと思うかとのメディアからの質問に対して正しかったと思うと応え、自分はあの当時海軍の戦闘機乗りで太平洋上で日本軍に撃墜された事もあると感想を洩らした。そのあと、原爆は日本の真珠湾奇襲への当然の報復であったと語った。ブッシュ元大統領はこう述べることで平均的アメリカ人の感情を代弁していたといえる。ベトナム参戦拒否をしたクリントン大統領ですらブッシュと同意見であるところをみると、今後大統領がかわっても、日本への原爆投下の非を認める可能性はないだろうし、非を認めさせようとする努力を重ねても意味がない。過去の過ちを繰り返さない努力は必要だが、過去の過ちを互いにあげつらうことは日米を再び昔日の敵味方として対立し合った感情を喚び戻すことになりかね

ず、この応酬は必ず気まずさを双方にのこすことになり友好を深める役には立たない。

こういう意味合いからすれば、ヒロシマ問題は真珠湾奇襲の問題とともに特に社交上の会食の際には避けなければならない話題である。そのことを十分に留意して、この話題を別の機会に慎重に持ち出して、通り一遍でない歴史的理解をお互いに深め合うことは必要であろう。

そのためにはまず日本側の真珠湾奇襲の真偽をたしかめておくことが必要であろう。

III

日本軍が卑怯な不意討ちをハワイ海軍基地にたいしてなぜ行ったのか、と過去を省りみてみよう。真珠湾奇襲攻撃を秘密裡にきめたのは太平洋戦争勃発前の日本の大本営と陸海軍の連絡会議の出席者達であったのであって、その非を今日の日本国民に向かって訴えることはできるが責任を担わせることはできない。

当時ワシントンの日本大使館宛の日本政府の暗号電報はすべて（ハワイ攻撃の二日前に打電した最後通牒に匹敵する覚書に至るまで）アメリカ側に解読されていた。ところがアメリカ側は日本海軍が太平洋の真中のハワイを急襲するなどとは夢にも思っていなかった。だからこそ、日本からの「最後通牒」を正式に受けとる前に解読文を読んだローズヴェルト大統領は至急電で東京のアメリカ大使宛に昭和天皇にたいして素知らぬ態度の親書を送って話し合いによる決着に期待をよせている。（この電報は枢軸国関係を優先扱いする方針の為配達後回しにされ、天皇のもとに届けられたのは開戦当日の未明三時であった）

大統領府は日本が12月7日の日曜日（アメリカ時間）に攻撃を開始するらしいことは推測はできたが、どこを攻撃してくるかは読めなかった。大統領の忠告に従ってマーシャル参謀総長はハワイを含む太平洋方面軍の各基地に

念のために日本軍の攻撃にそなえるように打電させた。しかしこの電報は連絡の不備の為に、ハワイに届いたときにはもう日本軍の攻撃が終りかけていたときであった。他方、ワシントンの日本大使館は半どんの土曜日に受けとった暗号電報を解読したり清書したりするのに手間どった。翌日が日曜日という気のゆるみもあったし、米国人のタイピストに清書を依頼することは本庁から厳重に禁じられていた。結局、正式文書が完成し野村、来栖両大使がアメリカ国務省のハル長官に覚書を届けたときはハワイの真珠湾攻撃が終っていた午後一時半だった。ハル長官ははじめて覚書を手にしたように演技して、日本側の卑劣な裏切り行為をなじった。

どのように言い訳をしても、日本が奇襲攻撃をしたことは否定できない歴史的事実であった。

SNEAK ATTACK——フェアプレイの精神を重視するアメリカ人にとって、だまし討ちほど卑怯きわまる行為はなかった。日本の武士道も闇討ちを恥辱とした。暗号によらず平文の英文電報に託して、前日の土曜日、堂々と宣戦布告を行っていたとしたら、少くとも、卑怯な日本人のイメージはつくられずに済んだかもしれない。しかし、そういうことができない日本であったからこそ奇襲に賭けたのであった。長文の暗号電報を週末に外務公館に送り手間をかけさせたのも手のこんだ謀略の一部であったのかと疑念が湧いてくる。

山本五十六は連合艦隊司令長官としてアメリカの太平洋艦隊の撃滅を命ぜられ、その苦肉の策がこのハワイ奇襲作戦だったのである。東郷元帥の部下として日本海海戦に参戦し手に負傷した。その後の大使館付きの武官としての長い滞米経験も、山本にハワイ奇襲が逆効果となることを悟らせるほどアメリカ理解を深めることにはならなかった。

IV

開戦時、在米海軍武官補佐官としてワシントンに駐在した実松讓氏は真珠

湾攻撃の奇襲性を論証した著書『真珠湾までの365日』の中で「真珠湾攻撃を成功させるための絶対条件は、米側の不意をつくこと、つまり、奇襲作戦でなければならぬ」と奇襲の要素を強調し、「この奇襲のためには機密を厳重に保持するとともに、できれば、わが企図について相手の判断を誤らせる必要がある。そこで日本海軍は、中央といわず艦隊といわず、全海軍が一体となって考えられるあらゆる手をうった」と書いている。¹

ハワイ奇襲攻撃と開戦早々のマレー沖海戦等で当然の勝利を収めたあと、日本は愚かにも、しばし勝利の美酒に酔った。山本が予測した通り、わずか半年ばかり優位を保ったあと、ミッドウェイ海戦での大敗にはじまり日本海軍の連敗が続いた。大東亜共栄圏の夢も破れ勝敗の行方は誰の目にも明白であったのに、軍部には外交ルートで和議による政治的決着を図る手立ても着想もなかった。軍部は本来、自国の政治的意志の強制をその主たる任務としており和戦両用のかまえを必要としている。ところが相手国の意志はおろか、自国政府の意志の吟味をすることを知らず、ただ闇雲に領土拡張に突っ走り、終息する方策を知らないと自滅することになる。優れた将軍が国の元首になりうるとすれば、それは内外の政治的意志の動向を正しく見極めめる判断力を持った場合である。ところが和戦の決断のつかない軍人が一国の指導者となった場合、破綻が生ずるのは目に見えている。

東條英機は近衛内閣を総辞職させた後大命を受けて首相となったが、文民近衛内閣が果し得なかった国際社会での日本外交の破綻の修復が東條にできる筈がなかった。満洲事変を発端とする中国侵略の主役である日本陸軍の長を宰相に選んだことは国際連盟脱退によって国際的孤立化を深めていた日本が選んだ最悪のシナリオであった。この時点で日本の敗戦はきまった様なものである。近衛内閣のもとで劣悪な外交が奇矯な人物、松岡洋右によって進められたことは事実であり、満鉄理事であった松岡が国際連盟に日本代表として出席、満洲問題で非難されると脱退して日本の墓穴を掘り、日独伊三国同盟という百害あって一利なき協定を結んで不必要に敵をふやしたばかり

か、1941年4月にはスターリンに手玉にとられて日ソ中立条約を締結してソ連に後顧のおそれなくドイツと開戦できる条件をつくったり、日米交渉がまとまりそうなとき、ぶちこわしてしまうなど、松岡外相は自分の名誉心の為に国運を傾ける失敗を重ねた。

近衛内閣が犯した最大の過ちは「帝国国策遂行要領」を御前会議で決定（9月6日）したことであった。これは対米戦争を辞さずというかまえて日米外交交渉を続ける順序を定めたものであり、天皇は不満だったがあくまで外交が第一とごまかされ、押し切られてしまった。² 近衛内閣が行き詰まった対米外交を打開し石油資源などを得るためには陸軍に中国からの撤兵を考えさせる必要があった。しかし、東條陸相は頑として応ぜず、逆に近衛に内閣総辞職をつきつけた。「帝国国策」の順序に従えば外交の道が閉ざされたときは年末の開戦が予定の計画として一気に浮上する。東條内閣が誕生したことで対米先制攻撃が必至となった。こうした日本政府と軍部の動向は機密事項であり、外務大臣から野村大使あての訓令の電報を逐一解読していたアメリカの諜報機関も、日本の国民感情の反米の高まりは適確にとらえていたが噂されたハワイ奇襲が本当に起るとは予測できなかった。それとも予測したが故に意図的に日本に最初の一撃を選ばせたのだろうか。

V

中国侵略をすすめた東條陸相を首班にすれば、それは開戦への道を選ぶことにほかならなかった。これほど自明なことに重臣会議はどうして気付かなかったのか。東條ならば日米交渉ができるし、天皇のお言葉があれば米国と戦争をするようなことはしないと強く推した木戸幸一の推選の言をうかつに信じた重臣会議のメンバーを責めたところで仕方がない。

当時の日本の権力の中枢を握っていたのは陸軍であり、海軍を抑えつけた上で陸軍主導で天皇の統帥権を補弼する権限を手中に収めていた以上、陸相東條が拒否すれば何人も組閣できない。となると、天皇が東條に海軍との協

力を求め組閣の大命を下すしかなかった。

だからと言って、昭和天皇に責任があるとするのは短絡した論理であって、天皇は責任を担える立場にはいなかった。大日本帝国憲法（旧憲法）のもとにおいては「神聖ニシテ侵スヘカラス」（第三条）とされた天皇は過ちを犯すことができない。過ちは臣下が犯すものであり、天皇が大権を行使する場合は内閣が全員一致で決定した最終的な判断を天皇に提示して裁可を仰ぐことになる。これにたいしては天皇は拒否権を持ってはいるが使えない。使えば政治の運営が停止してしまう。東條首相が重臣会議で選ばれたときも、天皇は「帝国国策」の戦争準備を白紙還元して日米の平和的交渉につとめる様木戸を通じて求められたが東條内閣にそれを実現することは不可能であった。昭和天皇はこのときのことをふりかえって、晩年に次のように語っている。

「実に石油の輸入禁止は日本を窮地に追い込んだものである。かくなつた以上は、万一の僥倖に期しても、戦つた方が良いという考が決定的になつたのは自然の勢と云わねばならぬ、若しあの時、私が主戦論を抑へたらば、陸海に多年錬磨の精鋭なる軍を持ち乍ら、ムザムザ米国に屈伏すると云ふので、国内の与論は必ず沸騰し、クーデタが起つたであらう。実に難しい時であつた。その内にハル（國務長官）の所謂最后通牒が来たので、外交的にも最後の段階に立至つた訳である」³

天皇に戦争責任をなすりつけるのは無責任な理論である。天皇自体から決定権を奪っておきながら責任だけを負わせれば、自分たちの責任は免れるという魂胆があるからだ。英国の歴史家である A. J. P. テイラーは『第二次大戦の指導者たち』という本の中で、日本の戦争指導者は現人神で無謬性が制度化された天皇には求めないと述べている。また、東條首相に代表される日本政府が戦争を指導する背景となつたのは、日本国民が第一次大戦に参戦して協力した甲斐もなく国際連盟など新世界の夢をふりまいたウィルソン・

アメリカ大統領や「けったいなチビの黄色いやつら」は白人並みに扱えないと云ったチャーチルに欺かれたと感じて激昂した為で、アメリカが南北アメリカを支配し、イギリスはインドやアフリカを支配して世界中を英国製品の市場としているのなら、日本がアジアを支配しても当然ではないかと考えたことにあると歴史家らしい理解を示している。東條も彼によれば組織体の決議を代表として執行した単なる官僚の一人に過ぎず、チャーチル、ルーズヴェルト、スターリン、ヒトラー、ムッソリーニなど実質的に戦争の遂行に全責任を担って行動した大物の立て役者たちと同レベルにはおけないとしている。そういう意味からか、この本の表紙は大立て者の肖像のコラージュを重ねてあるが、日本に相当するところは指導者不明 War Lords Anonymous として日本の海軍旗がかわりにつかわれている。⁴

東條も軍旗のもとで首相をつとめる一方、他の要職を兼務し、その兼務振りは外務、内務、陸軍、文部、商工、軍需の大臣職に及んだが、そのどの職務もお座りになることが読めないところが小人物であった。厚かましくも1941年10月から44年7月までの長期にわたって首相の座にあって敗け戦を指導し、グワムとサイパンを失い遂に退陣させられた。ここまで東條に指導権を許した重臣たちは、東條の二番煎じにすぎない小磯国昭を後継主班に選び自分たちの存在の有害無益さを露呈した。全くこの連中には国の安寧どころか存立の対策すらも立てる能力がなかったのであった。

東條が辞任に追い込まれた段階で国の内外に明らかになったことは、東條が何ら実質的な指導権を握っていたわけでもない事実であった。ヒトラーが死んだときドイツ軍の抵抗が終ったが、それはヒトラーが首謀者であり真の指導者であったからであった。東條は弊履のごとく捨てられたが、日本国民の拳国一致の戦意には一層の真剣味が見られるようになった。戦局が厳しさを増したこの時期を境に、日本の戦いは侵略地域からの撤収の段階から、歴然とした祖国防衛戦争へと位相が転換した為であった。国民の多くに目覚めはじめた感情は厭戦などという安閑としたものではなく、内地であれ外地で

あれ、国民の多くが生き残りを賭けた切迫した状況にあると自覚し、その打開策は戦闘における挺身的行動しかないと確信するものが少くなかった。

VI

誰が自分が信頼もしていない自国政府や上官の為に喜んで自殺的行為に走るであろうか。特攻機に乗り込む兵士、斬り込み隊に加わり出撃する兵士たちのすべてにとって、二度と生きて帰ることはないを知りつつも敢て欣然と死地への途を選んだとき、その脳裡にあったのは自分の死が必ず祖国の同胞の幸福や安全に寄与するはずであるという信念であった。

ある特攻隊員は静岡市に住む母親に次のように書きのこしている。

お母様ほんとに長い間良信を可愛がって下さり有難うございました
良信は立派に御国の為に盡くして護国の鬼となります

今度の出撃は死すを覚悟の上です 良信はお母様の子であってお母様の子ではありません 天皇陛下の赤子^{せきし}です 良信が若し死んでも決して淋しがらないで下さいね

しかし少しの事では死にません 敵をさんざん打ち負かし何十機何百機と打落します 勝って勝って末永く天皇陛下に忠を盡くす覚悟です⁵

沖繩作戦に出動したアメリカの空母イントレピッド、ハンコック、の乗組員は銃身が灼ける程撃ちまくる弾幕をくぐって次々と侵入してくる日本の神風特攻機が火だるまになりながら突入してくる恐怖に気が狂いそうになったという。KAMIKAZE は空母セント・ローあるいは巡洋艦インディアナポリスなどを撃沈させ遂に英語の辞書にまで載るほどに恐怖の代名詞的存在となった。日本本土を防衛する為の必死の努力の末、物量と電波兵器を誇る米軍の前では生命を賭して爆弾を操作するしかないとして多数の特攻兵器が開発された。戦車の底にタコ壺の壕内から這い出して爆雷を磁石でとりつける訓練から、水上、水中用の震洋、回天、蛟龍、海龍から伏龍、さらにはロケッ

ト機桜花に至るまで、米軍の上陸作戦を阻止する為の水陸両面の訓練が行われた。⁶

筆者は九州の山中にいて軍需用の地下工場の建設現場で材木の運搬を手伝っていた当時、飛行雲を曳きながら爆撃に向うB29が西陽を受けて光るのをよく見上げた記憶がある。すでに日本の大都市は殆んどが焦土と化しており、それでも戦いは続いていた。しかし、日本が降伏する話などを口にする者もなく、皆黙々と持場をまもって働いた。これが日本民族の偉大な持久力とも言うべきものなのか、誰一人として軍部の愚痴をこぼす者もなく、運命を呪うものもなく、戦争は頭上を過ぎる暴風か大震災なみにひたすら耐えるものであった。戦争反対や早期終結を叫ぶ者もなかったことは、そのような声をあげる権利があることすら教えられたことがなかったからであるが、今一つは祖国に外敵による侵略による危急存亡の秋が迫っており、祖国をまもる戦いは生命の続く限り続行すべきものと確信していたからだった。

当時の日本には愚昧で未開の国民意識しかなかったと冷やかに断ずるのは多分、その当時まだ生まれてもいなかった世代か半知半解の人民民主主義者である。どの民族であれ日本が遭遇した当時の状況におかれたならば、生命を賭して郷土を守ろうとしたであろう。

このような勇猛心を持った二万余の兵士が待ちうけていた日本領土の硫黄島での戦闘が玉砕に終わったとき米軍の死傷者は守備隊の数を越える三万に近い数に達した。何のための戦闘なのか、何のための戦死なのか。日本軍のバンザイ攻撃を受けた米兵士は戦場の混乱の中で悪夢なら目覚めたいとして、自分自身の生死を幾度となくたしかめたという。

私は死にたかった、それも死ぬのなら早く死にたかった。私はこの悲惨極まりない世界を忘れたかった。私は戦争を呪い、戦争を起した連中を呪った。私はこんなところに私をつかわした神を呪った…何でまたこんな辛い目に遭わなくてはならないのか。私が何をしたというのか、何

のためにこんな目に遭わされるのか全くわからない。⁷

砲撃で腕を吹きとばされた歩兵が意識がもうろうとして行く中で必死で状況を把握し、生きのびるすべを考えつづける。

これは地獄だ。そうでなければこんな散々な目に遭わされる筈がない。私は喚きちらし、呪いの云葉を吐いた。なぜなのか。こんなつらい目に遭わされるなんて、俺が一体何をしたというのか。何の答えも返ってこなかった。私は大声をあげて看護兵を呼んだ、無意識のうちに生きたいと思ったのだ。私は右手を血の吹き出している切断面にあてがおうとしたが、腕を支える力も失せていた。左側に目を移すと、左腕のあたりが血まみれでひどい状態になっていた。手のひらと指全部が逆様に折れ曲っていて、まるで花が咲いて日の光を求めているように見えた。⁸

連合軍兵士の間には日本軍に生命を断たれ二度と生還できない不吉な予感がひろがっていた。

VII

1945年4月1日沖繩上陸作戦がはじまった。18万余をのせた連合軍艦艇が集結し、日本側からの神風特攻が必死の攻撃で応じたが上陸を阻止できず約9万5千の陸海の守備隊は全滅、民間人をあわせると18万人が死亡し、6月末に連合軍の手に陥落。この間、小磯内閣は退陣、老齢77才の鈴木貫太郎内閣のもとで本土決戦の方針が確定、日本民族は全体的破滅に向って狂気の進撃をつづけているかに見えた。しかし、皇居も焼け重臣たちの邸も空襲で焼ける段階で遅すぎた終戦工作が密かに進められた。他方、4月12日にはルーズベルトの急死によりトルーマンが大統領に就任し、最終段階に達した欧州戦線の終戦処理は4月30日のヒトラーの自殺により一挙に現実味を帯びる。つまり、ソ連との対決であった。日本政府は日ソ中立条約を結んでいたソ連

に近衛による終戦工作を打診し拒否された。ソ連はドイツの降伏のあと欧州方面軍を大挙満洲国境に向って移動させた。

6月末、沖縄全島は連合軍の手中に陥ちたがそのときには沖縄は焦土と化していた。連合軍は11月に予定された九州上陸作戦 Operation Olympic の準備のため本土への空爆と艦砲射撃を強めた。連合軍は沖縄戦には18万の兵力を投入して5万を失ったが、九州上陸作戦には65万の兵力、艦艇2500、航空機5000機が支援することになっていた。日本軍は九州方面軍54万、特攻機5000が迎え討つ準備が出来ており、上陸想定地点は堅固に防禦陣地が設営されていた。上陸作戦は激烈なものとなり、約3ヶ月を要し、米軍側の戦死2万、戦傷7万5千という⁹ 想定もあるが、この数字は楽観的過ぎるであろう。すでに4月ヒトラーは自決し、5月7日のドイツの降伏で欧州での戦闘は終り、太平洋に輸送されてきた連合軍兵士たちは日本軍との対決の心理的苦痛に耐えきれず一日も早く帰還したい一念であった。彼らは日本本土上陸作戦で先陣部隊に編成されて第一波、第二波の攻撃を実行した場合はほぼ確実に戦死することを予感していた。おそらく20万の死傷者かそれに倍する死傷者が連合軍側に生ずるだろうとトルーマン大統領自身も考えた。しかも、翌年の三月には九十九里浜への上陸作戦 Operation Coronet により主都東京に迫ろうとしており、こちらでは更に大きな犠牲を強いられる為、「日本を降伏させるまでには約50万人の米国人の生命が失われるだろう」¹⁰ というマーシャル参謀総長の発言をトルーマンは回想録 *Years of Decisions* の中で引用している。ポツダム会議に出席中のトルーマン大統領のもとに陸軍長官のステュムソンから原子爆弾の開発の成功が伝えられたとき、トルーマンは巨額の子算を投じた人類史上最大の破壊力をもつ爆弾の実現を喜び米兵の犠牲を減らす為にその使用を考えた。ステュムソンは70才、フェアプレイにこだわるこの老将はその使用には賛成しかねていたが押し切られた。トルーマンはマンハッタン計画の協力国である英国のチャーチルに原子爆弾投下の承諾を求めた。チャーチルは賛成し、軍隊でなく都市に落すように希望したと伝えられ

ている。ポツダム会談中に行われた英国の戦後初の総選挙で落選したチャーチルにかわってアトリー首相が出席し、会談は原爆を握ったトルーマンの一人舞台となった。トルーマンは日本がポツダム宣言を8月3日までに受諾する意向を示さなければ原爆を投下するように命令した。

広島に原爆が投下されたしらせをトルーマンは欧州から帰国する巡洋艦上で聞き、酒保での演芸会の席上大いに笑ったという。太平洋上の連合軍の兵士たちは、原爆の投下の報道を欣喜雀躍して迎えた。生還できることになった、本土上陸作戦に参加せずにすむ、戦争は間もなく終るだろう、というのが彼らの感概だった。ファッセルは歴史作家ウィリアム・マンチェスターの言葉「考えて見給え、日本本土上陸作戦を敢行したときに生ずる死者の数を——厩大な数の米兵だけでなく数百万の日本人の生命が救われたのだ——原爆を与えて下さった神に感謝すべきですよ」¹¹ を引用している。

8月6日の朝8時15分、青天の広島の上空で閃光が走り、次の瞬間に衝撃波と熱線で12万人が即死、そして、ほぼ同数の人間が被爆者として緩慢な死をとげることになった。広島が全滅したにも拘らず鈴木内閣はこの「新型爆弾」を「無視」する姿勢をとった。アメリカ軍は8月9日長崎に二発目の原爆を落した。東京の最高戦争指導会議は8月10日遂にポツダム宣言を国体護持を条件に受諾する旨連合国に通知し、15日、前日の御前会議の決定を経て、終戦の詔勅が玉音放送された。

トルーマンは長崎に投下された二発目の原爆がその前日日本に宣言布告したソ連への牽制になると期待した。ソ連は日本がポツダム宣言を受諾したとき、北海道をも北方領土に加えて要求しアメリカ側に拒否されている。原子爆弾の完成が遅れていたなら、日本が連合軍の本土上陸作戦のため朝鮮戦争やヴェトナム戦争並みの戦場と化し国土を蹂躪された挙句に南北に分断占領される結果になったことは大いにありうることである。広島と長崎の原爆犠牲者が身替りとなって命を祖国と人類の為に捧げたのである。命あるものは感謝し犠牲者の瞑福を祈らねばならない。

VIII

こうして太平洋戦争は終り、米軍占領下でポツダム宣言にもとづく日本の軍事力の解体と民主化がすすめられ、国民主権と象徴天皇と戦力放棄を規定した日本国憲法が制定された。冷戦体制のため米軍の日本駐留が長く続き、朝鮮戦争とヴェトナム戦争の特需による戦争景気が日本経済を戦前以上の水準に引きあげた為、日本は軍事と政治をアメリカにゆだねたかたちでの世界有数の生産力を持つ国となった。

冷戦体制と空前の消費ブームの時代が去ったあと、低成長で環境保全型の90年代に入り、国際社会で日本のあり方への見直しが求められている。戦前は軍部、戦後はアメリカに牛耳られてきた日本国民が国際社会において諸国から信頼される国となるためには、まだ一層の努力が必要であろう。

注

- 1 実松讓『真珠湾までの365日——真珠湾攻撃、その背景と謀略』光人社NF文庫、1995年——本稿における奇襲の事実関係は、この書物に依拠するところが多い。その他の史実は『日本近現代史辞典』（東洋経済新報社、1978年）を参照した。
- 2 昭和天皇は御前会議について戦後次のような感想をもらしておられる。「御前会議といふものは、おかしなものである。枢密院議長を除く外の出席者は全部既に閣議又は連絡会議等に於て、意見一致の上、出席してゐるので、議案に対し反対意見を開陳し得る立場の者は枢密院議長只一人であつて、多勢に無勢、如何ともなし難い。全く形式的なもので、天皇には会議の空気を支配する決定権は、ない」
寺崎英成／マリコ・テラサキ・ミラー著、『昭和天皇独白録』文春文庫、1995年、56頁
- 3 同上『昭和天皇独白録』84、85頁
- 4 A. J. P. Taylor, *The War Lords*, (Penguin Bks, 1976)
- 5 江田島海軍兵学校記念館の遺品から筆者が収録。この他の遺書については拙稿 *ETAJIMA* (英文)、小野修『市民社会の平和と安全』（昭和堂、1980年）の付録を参照。
- 6 特攻兵器と本土防衛計画については『写真・太平洋戦争』第10巻「終戦時の帝国艦艇」（光人社、1995年）に詳しい。
- 7, 8 Paul Fussell, *Thank God for the Atom Bomb and Other Essays*, (New York, Bal-

lantine Books, 1988) pp. 1-35.

9 *Newsweek*, July 24, 1995.

10 Harry S. Truman ほか *HIROSHIMA, We Made the Decision*, (Sansuisha, 1985)

11 William Manchester, *Goodby Darkness: A Memoir of the Pacific War for The New York Review of Books*, —前出 Paul Fussell の *Thank God for the Atom Bomb* に引用がされている。 p. 7.